

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ぬるくす男

佐藤家の昔話（七）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ぬるくす男

佐藤家の昔話（七）

編 武 田 正

ぬるくす男

269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256
七ヶ宿村湯の原	山帰来（ドース・ブドウ）	たわけ和尚とやぶ医者	枳眼	狐娘	タツノオトシゴ	亀の甲羅	ローソク	ぬるくす夫婦	ぬるくす男	猫婆	男三毛猫の守り神	ごしやげた時は決して手を動かすな	まけ兎

24	23	20	18	17	16	13	12	12	10	9	8	7	5
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---

佐藤家の昔話（七）

281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	
高砂族の娘 ——九州で聞いた話——	北海遼空知郡の人から聞いた話——	星のはなし	栗の実と西瓜	干柿売りと南蛮粉売り	大阪の蛙と京都の蛙	ねずみと蛇	弘法大師と人身御供	八十尋 しまった時の「合槌」	語りが上手すぎて飽きて	団子の木	果てなしばなし	ほたる長者
48	44	43	42	39	37	34	32	32	29	29	26	

298 297 296 295 284 293 292 291 290 289 288 287 286 285 284 283 282
 屁で返事 珠玉の隠し場所 なんがい、なんがい 入歯をのんだ 老人の接吻 鶯の谷渡り かかなくとも 的ぼぼ 風呂屋の娘 畳が敷いてあつた 女郎の半分買い 熊追払い 三味線 拭いて帰した 高だまの庄右衛門 米千里 木のはなし

65 64 64 63 62 62 61 60 59 58 57 56 55 55 53 52 49

309 308 307 306 305 304 303 302 301 300 299
 あとがき 由緒ばなし（五十一項目） 大人語りの「天人女房」 ここは便所か マスの占い 多いところはええべな なんとった 大きい者同士 おさとさわいち 栗拾い 初産のスウ くさい くさい

106 76 75 74 73 72 71 70 69 67 67 65

凡 例

- 一、二七〇～二八四話はテープレコーダーによって収録した。
- 二、二五六～二七〇話は佐藤氏がノートしてまとめたものである。
- 三、二八五～三〇七話は艶笑譚で、発表については編者にまかされたものであるが、研究の資料として収録したものである。
- 四、三〇九話の「由緒ばなし」はノートにしたものを一部読みやすくして記したものである。

むがしむがし、兎ど亀ど、向いの山まで走りくらしたど。ほうして兎が昼眠して、あの、のろまの亀さんに敗げた。

ほの話が兎村の村中さ聞えでしまった。そうするずど、兎村の庄屋さん、かんに怒って、わが兎村の名折れだて、みんなの前でしこだまごしやがった。

「ちよつとのつもりだったげんど、春先であまり気持がええがったもんだから」
申しわけねえって怒らった。

ちようどその頃、隣の村の一匹狼がら兎の小娘を、おれんどこさ出せ、兎身御供にするて言うてきた。兎村ではみんな心配した。ほんどき、先の敗け兎が、

「庄屋さん、おればやってけらっしゃい」

て、名のり出だんだど。

「どうせ、おれなど村にいても、のけ者だから、人身御供になるはあ」

て言うて、ほうして一人で一匹狼のいる岩山まで行ったんだど。したれば狼が

舌なめずりしながら、待っていただけはあ。

「ああ、よくきた。小娘は」

「はい、やがて着ぐ頃だげんど、みんなに送らつてお別れなどしてきたがら、少々遅つて来る。私が道案内して来たんだ」

「そうが、そうが」

「で、狼どの、その一番高い岩さ登ると、見えつかも知んね」

ていうたれば、早く食くだいくて我慢さんねくて、岩の上さ登った。ほの時、すかさず後足で力いっぱい兎さんが狼ば蹴けったんだど。

したれば、谷底さ狼が落ちで死んでしまったんだどはあ。ほれから誰も敗け兎やて言ねで、勝ち兎やていうようになったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

ごしやげた時は決して手を動かすな

むがしむがし、沖縄を平定した薩摩軍は、数多くの役人を送って年貢をきびしく取立てたんだ。ただでさえ旱魃などばりある沖縄では容易でなかつたんだ。みんな娘まで売らんなねようなあんばいだったんだ。

その中で、一人の情深い役人がいて、島民に金まで貸してめんどろ見だ人、いだんだ。

ところが、一人の人が期限が来ても、どうしても返済すね人いだんだ。催促に行ぐど、今度、今度てばり言つてなかなか済なさね。ある時、今日こそは刀にかけても思つて行つたれば、実は家は幼子ばかり多くて、言つたれば、役人が問答無用で切りつけると思つたれば、

「お役人さま、お役人さま、決してごしやげた時は、手を動かさねで呉けろ。手を動かさねで呉ろ」

て言われて思い止まって、そのうち所用があつて、その役人が家さ帰つたんだ

ど。ほうして自分の家さそおつと入つて行つて、薄暗い時、寢床見だれば、自分のおかたど男が寝つただんだけど。「このばいため！」一刀両断にして呉^けんべと思つたんだど。んだげんどその時、へごしやげた時、手を動かすな〜ていうことを思い出して、

「これこれ、今帰つたぞ」

て言うて見たれば、男だと思つたな、自分の母親が、男の格好して、嫁ば守つていだなだけど。もしも手を動かしていれば、大事になつどこだけどはあ。

258 男三毛猫の守り神

むがしむがし、ある家さ、とてもきれいな嫁さん来たんだだけど。

ところが、だんだん顔色が青ざめて行ぐんだだけど。毎朝便所さ行く時、どういうわけが、三毛猫が追^おかけで行ぐんだだけど。

「なんぼ、なんでも許さんね」

ていうので、旦那さま、脇差で猫の首はねだんだ。したればギャツて言う
けあ、便所の屋根裏さ飛んで行つて、何がさかぶりついたんだ。よくよく見だ
れば、屋根裏さ五間もあるような蛇がいて、ほの蛇が若奥さんの生血ば、舌でべ
ろろて吸い上げんなだけ。んだから、だんだん青ざめで来るなだけ。はえ
づ見つた男の三毛猫が蛇から守つて呉だなだけ。いやいや、これは悪れごどし
たはあていうわけで、お宮さま建て、守り神として祀つただけ。今でも三毛の男
猫は守り神だて言うなだけ。

259 猫 婆

むがしむがし、江戸時代にとつても猫好きなばあちゃん居だけ。中国から渡つてきたばかりの時は、猫も宝物同様であつて、えらい人の持ち

ものだったが、だんだんふえて、百姓・町人にももらってもらったんだ。それでもまだまだ増^ふえで、捨て子するようになったところで、そのばんちや、可哀そうでなんなくて、全部育てだところが、何せ一人暮しの老人で、収入が少ない。人の落し物など失敬して、知らん顔してしまう。今でも落し物など失敬する事ば「ネコババ」するなんて言うなだけど。

260 ぬるくす男

むがし、あるところに、とってもぬるくすで、よこのものたてにもしね、むろん働くことなの全然しね、朝寝・昼眠ばりして、なんとも手のつけようがないので、親戚が相談して追出すことにした。

でも、母親がかわいそうで、大きな握りめし二つ握って呉^けだ。ところが握り飯背負うなもめんどくさい、母親に背負わせでもらって道降って行った。ちよう

「ど昼ごろになって、腹減ってきたげんど、降ろして食うのもめんどくさい。したれば、向うの方から笠かぶって、口開いてくる若者いだど。」

「はあ、あの野郎、腹減っているんだなあ、よし、一つヤキメシ一つ呉^けで、降してもらうべ」

と思つて、

「君、君、腹減ってんなでないか」

て聞いたれば、

「いやいや、おれは笠のひもゆるんでしめのめんどくさいがら、口開けで紐しめで歩くなだ」

て言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

261 ぬるくす夫婦

むがし、あるところに、とってもぬるくす夫婦いだっけど。

主人の方は主人の方で、田んぼ畔は水がもるから、塗るには塗るが、畔がす削らねで、毎年塗って行つた。だんだん田狭くなつて、田植するところなくなつてしまつたはあて言うたれば、おがだ、おがだで、鍋とがねで御飯炊ぎしつたほど御飯炊ぐどこなくなつてはあて言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

262 ローソク

むかし、お伊勢参り行つて、帰りにお土産ローソク買つてきた。

なかなか、ランプより明るくて、造作なくて、ええもんだていうので、ほして親類、あるいは友達さ配つたところが、もらった方では、何だかわかんねげんど、

土産物だから、食べものだべというわけで、みんな御馳走なれ、御馳走なれて食くてしまったところが、

「あら、灯明にすんなだて言わねで置いてきた。行つて教えてくんなね」

て言うので行つて、廻つて見だれば、使いに行った人は、なんだ灯りの元食もとうなて、腹焼げつど悪れがら、飛び込め、飛び込めて言うて、さむい時、みんな川さ飛び込んだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

263 亀の甲羅

むかし、竜宮の乙姫さま、腹痛くして、何たなんことしても治らね。みんな困つてしまった。ところが竜宮の古い書物見たれば、猿の生肝が一番ええて書いであつたつけ。そこで、

「誰が一番、猿が島がら猿をつれてくるにええがんべ」

て、話になったれば、何んというても、水の中でも岡でも、大丈夫な亀さん
にお願いすんべえて話がまとまって、亀さんが浦島太郎のときのように、猿が島さ
行つて、言葉巧みに猿をつれてきたところが、見だこともない、竜宮の部屋に目
パチクリしながら眺めつだ。したれば、かげの部屋でひそひそ話した。

「ああ、やっと乙姫さま猿の生き肝のませられつだなあ」

ていう話声聞こえて来たんだ。海の底の竜宮見せつからて、うまいこと言う
て、

「おれから生き肝取つて飲ませつだつたのが」

ていうわけで、猿が考えだ。

「ようし」

ていうわけで、大声で泣き真似した。したれば、みんな寄つてきて、

「何した、まず」

て聞いだれば、大事なものを忘れて来た。何忘れて聞いて見たれば、

「肝、松の木さ虫干しして、そのままにしてきた。雨なの降ると濡れてしまうが

ら、取ってきて、ゆつくり見物させでもらいだなだ」

て言った。

「そうか、ほんであ」

ていうわけで、すぐまた亀さのせで、猿が島さ生き肝取りにきたところが、陸に上がるより早く、

「こら、よくもおれば騙したなあ」

ていうより早く亀は目よりも高く差上げて、岩さぶつつけたんだど。んだほで、甲羅さヒビが割れて、今でも亀の子の背中では割れでいるなだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むがし、生肝のことが誰が猿さ聞かせたでいうことで、会議になった。誰だべ
彼だべて、長々と話合いが続いたげんど、誰も言うた人いねえ。

んでは、隣の部屋におった者だていうことになって、竜の親類の「タツ」でな
いがんべがていうことになって聞いたれば、何げなく喜びのあまり、おれ言うた
て言うたんだど。

「この馬鹿野郎、お前のおかげで、せっかく連れできた猿が逃げられんべし、亀
さんが大怪我すんべし、お前ばなの、竜宮さ置くわけにいがねがら、出て行げ」
て、竜宮から外さおろされてしまったんだど。んだから今でも、「タツノオトシ
ゴ」ていうて、海の中さまよって歩くのだけど。どんぴんからりん、すっからり
ん。

むがしむがし、ある村にとつても働き者の若衆いだんだったど。

ある日、とつぜん若い娘けゴ来て、

「何とか、おれば置いて呉けらんないべが」

て頼んだんだど。若衆はちよつと見だれば、ええ女なんだけど。んだげんども、困って、

「あなたみだいな、きれいな人、おれよりももつとええところいっぱいあつから、そごで頼んだ方が…」

て言うたげんど、ほの娘あ、かぶり横にふつて、何とが、何とがって頼むもんだから、置くことにしたんだど。

したれば、次の日がら働くこと、働くこと、朝早くからせつせ、せつせと働いて、村中の評判になたんだどはあ。んだげんど何だか米の御飯食べねで、油揚げとか、またランプの油などばり舐めてゐるなだけど。また村の人々が狐憑きでな

いがなていう人いで、狐憑きだら、村さ置くわけいがねがら、狐いぶしきかけで
みらんね。ほして狐ば追^ほい出してやんなねだなていうたんだど。

したれば、はえづ何処がで聞いっただほの娘が、居ねぐなてしまつたんだどはあ。
きつと山さ入って行つたなだべなあて、村人が語つたんだけど。

ほだいしているうち、若者もいねぐなてしまつたんだどはあ。二人山さ入って
行つて仲よく暮していだべなあて話していだけどはあ。

266

栃

まなぐ
眼

むがしむがし、ある村にとつても正直で、働き者いだんだけど。なんぼ働いて
も働いても、貧乏でなかなか楽にならんだけど。でもお観音さま信心で、毎
日お観音さまお参りは、かかさねんだけど。

ある晩、夢枕に立って、私の屋根がら飛び降つてみろて教えだんだど。朝げ早

ぐ屋根から飛び降つてみだれば、眼片方、どさがふつとんでしまった。ようやく手探りで拾つて入つたれば、反対に入れでしまったところが、腹の中みな見える。五臓六腑、ちようど今だら時計の中みだい、それぞれ動いているのが見えてきた。

したれば、そのことが村中の評判になつて、

「おればも見えてけろ、おれな、どごが悪くないが……」

て、いっぱい集まつてきて、見てもらう。特に五十歳過ぎの人が多い。ほだえしているうち、いつの間にか金がたんまり溜つて、お金持になつたすまなあ。そいづ常がねうらやましく見つた隣の親父、なぜして見るぐなつたて、しつこく聞くので、金も溜めたしはあ、隣の親父さ教えてやつた。

次の日、早速隣の親父、お観音さまの屋根がらとび降りたところが、両方とも目飛ばしてしまった。ほして両方の手で探してみたれば、あつけど。はえづいきなり入つたれば、目でなくて栃とちだったど。んだから今でも、役者セリフ間違つたりするずど、「トチツタ」なて言うなだけど。どんびんからりん、すつからりん。

むがしむがし、ある村にお寺と医者さまいだけど。

ところが二人は無類に仲がわるい。和尚が右て言うど、医者は左。お天氣のこ
とまで反対だった。

ある日、医者からていちようにお使いがきた。

「和尚さま、和尚さま」

いつもの呼捨てと違つて「様」つけできた。一通の手紙をよこし、ぜひお願い
致したき事之有というわけで、和尚もいい氣になつて、ひよっこり、ひよっこり
願われるままに、医者宅に行つたわけだ。ところがしんみりな顔した医者先
生、

「お願いというのは外でもないが、実は私のところに娘が三人おつてな、その娘
に田を分けてやるんだが、どうしてもうまく行かね。一町歩の田、三人でてい
ど、三反三畝三步三…てなつて行つて、割り切んねで残ると、ケンカの種だから、

何とがお願いできんまいか」

て願ったれば、和尚、ここぞとばかり、常がねのこともあるもんだから、

「えへん」

なて咳払いなどしたぐらいにして、

「一町歩とは三千坪。んだから千坪ずつ分けてやれば簡単でないが」

て言うたれば、

「なるほど、やっぱり」

なて、意味ありげに言うた。

「うん、やっぱり世間で言うとおりで。うん、わしのこと、そんなに評判が高いかな」

なて言うたれば、

「(田分け)なんの、たわけ和尚、たわけ和尚」

て言うて、それ半分ぐらい聞いた和尚、

「はかられた」

ていうわけで、どんどんと帰って行つた。

「あの藪医者め、何とかして…」

て思っているうちに名案が浮んできた。

数日後、こんどは寺の方がらお使いがきた。医者も計られまいと用心しながら、寺の屋敷に行つた。

ところが、和尚やっぱり平身低頭してお願いがございませうと言つた。

「なんでござるかな」

「いや、実は裏山に何度竹を植えても、枯れでダメだ。何とか枯死しねで生きつく方法はないもんだべが」

て、願わつた。

「なんだ、ほだなことが…」

自分がかつがれることなど忘れてしまつて、得意顔で、

「ふらずとも竹植える日は蓑と笠」

て教えたど。したれば和尚ここぞとばかり。

「ほうすつずど、先生みだいに〈薺〉になんべが」

268 山 帰 来（ドース・ブドウ）

むがしむがし、ある村で癩病になった息子いだけど。外の人は、むろん家の人にも嫌われて山に捨てらっただんだど。何とも仕様ないもんだから、毒でも飲んで死んでしまふべと思つて、毒だ毒だて教えらつていだ草の実を食べて死ぬつもりしたんだど。

したれば何だか体が軽くなつて、気分がええぐなつて、少し皮膚がこわれてしまったところが治りはじめだんだど。これは不思議と思つて、次々と食べてみたら、すっかりよくなつて、山からまた帰つてきたんだど。家ではみな喜んで、ほの果物のこと、癩が山から帰つてきたがら、「山归来」または「ドスブドウ」なて言うなだけど。

むがしむがし、七ヶ宿の湯の原というところは、出湯がふだで、村中の人が川のように流れる出湯さ毎日毎日入って、一日の作業のつかれをいやしているんだけど。

ところが、夏なの、男の人なのは禪一天で手拭いといった気軽さで湯に入りに行ったところが、いつもその、みんな入浴しているのぼ守るように大きな月の輪熊がゴロンとねそべって見ていんなだけど。

誰言うことなく、「湯神さまだ、湯神さまだ」てみんな信じていんだだけど。

さて、村人の一人で「引弓」の名人で、五介という若者がいんだだけど。ほして常に大物を取った自慢なのばりしているので、あの山の主、湯神さまば弓で射るでないかという噂が立ってしまったんだど。

ところが本人はひそかにその機会をねらっていた。村人からやめて呉ろ、やめて呉ろて言われても、何ものかに取憑かれだように、目の色まで変っていたんだ

けど。

で、ある日、その時がやってきた。その月の輪熊が、みんな入浴する時がくるので、山からいそいで湯場さくる途中を待ち受けて、茂ヶ沢山のかげに足場を取って待っていた。弓矢の矢じりには、トリカブト、サンショウのほか七つの毒を煎じつめた毒矢をつがえたど。

そんなことは露知らず、主さん、ゆうゆうとやってきた。そこを満月のように弓をふりしぼり、ヒヨウと矢は弓弦を離れた。五介は足をふみはずして、千仙の谷へ落ちて死んでしまった。湯神さまの月の輪熊は毒矢を足に受けて、びっこを引きながら、湯の出る穴の中さ入って行ってしまった。

それから今の今まで、熱い湯が冷たい普通の水になってしまった。村中干満村の熊野さまにお詣りしても、湯には変らねがったんだど。ほして蔵王山の向い側に主の湯神さまが穴を通して行ってしまった。んだから今でも、

「峨々、青根、遠刈田、南郷」

の方さ行ってしまつて、七ヶ宿さ一滴の湯も出ねなだけど。どんぴんからりん、

すっからりん。

270 ほたる長者

むがしむがし、ある村に貧乏でも、とても正直で働き者の若夫婦いだんだけど。
どういうわけか、二人の間には子どもがいねがったけど。んで、何とか子ども
が欲しいというて、神さま願かけでいたんだったど。ところがその満願の晩、
ほたるが丸まるばつて玉のようになって集ばるところあるんだけど。

ほして二人して大急ぎで、ほごさ行つて見だれば、女の赤子が捨てであつたん
だど。

「はあ、これは神さまのお授け者にちがいない」

て、喜んで拾つてきて育てたわけだ。

ところがまた不思議なことには、毎晩、草木も眠る丑三つの頃、民家の軒場が

三寸さがる頃になるずど、ほたるが玉になて集まる。なしてだべえと思つて行つて見て、またおどろいた。ほごがら、コンコンと湧出ていた泉はただの水でなく、とても甘口の酒だったんだど。

「これは重ね重ね、ありがたいことだ。神さまのおかげさまだ」

というわけで、二人で汲みはじめたれば、あら不思議、ほたるが三々五々と散って行く頃、ほの酒がただの清水に変わるんだけど。んだから真夜中だけ酒で、昼間はあたりまえの水だったわけだ。また誰にも気付がんねがつたわけだ。

古いわらべうたに、

ほたるさん さがらっしやい

こっちの水は 甘いぞ

というわけで、なるほど思つていだんだけど。

真夜中に酒を汲んで売り始めだれば、その酒のうまさにたちまち銘酒として大繁盛したんだど。ほしていつの間にか旦那さまになって、誰言うもなく、ほたるが大事にしているもんだから、「ほたる長者、ほたる長者」ていうようになったん

だけど。

さて、それがら星移り月が變つて、娘もめきめき器量よしになつて、酒の味のよいこともさることながら、娘の器量にひかれて酒買いに來る若者でひっきりなだけど。

ちようどほの頃、殿さま、ほの噂を聞いて、ほの娘ば、

「余の下に上げろ、ほうすつずど、お前を代官に取立ててつかわす」

て言わつて、名譽に目がくらんで、娘の幸福など忘つてしまつて、一方的に返事してしまつたんだど。

ところがいいいよ興入れの日は、月の明るい十五夜の大安の日ていうわけで、殿さま、伴そろえて、簞を仕立てて来てみたれば、娘の姿がどこにも見えねがつたんだどはあ。村人はみんな十五夜お月さま、お空さ連れで行つたんだべなて、こそこそと語つていだっけど。ほしてまた、ほたるの集まる酒の泉も出ねぐなつてはあ、もとの貧乏夫婦が、ぼつねんとうら底に立っていだっけど。どんぴんからりん、すつからりん。

271 果てなしばなし

むがしむがし、すばらしい大きい檜の木あつて、その檜の木さ、何千何万という実なつてで、毎日一つずつ落ちるんだど。ポタン。

次の日また一つ、ポタンと落つて、えんえんとつながっていて、毎日、ポタンポタンと落ちるんだど。

272 団子の木

むがしむがし、人間が上の方向いで、口さえ開いてると、上からいろいろな木の実、ポタンポタンと落つて来て、不自由しねがった。

ところが、団子の木さは何年かに一度しか実^ならねがったつて、実が。ところでその団子の木の実を食うなて、神さまから禁じられておった。なぜならば、それ

食うどお前だは額に汗して稼がねげば食んねぐなつから、苦勞すんなねから、決して団子の実だけは食うなて、そういう風に神さまから教えらつていだど。

そして他の木さは、いろいろな実なっけんど、団子の木さは何年かに一度しか実なんねがつた。

ところが、蛇が来て、女衆さ教えたど。

「あいつは、神さま、何してお前ださ食うなていうなだかていうど、本当のこと言うど、ほの実食れつど、人間が神さまより偉ぐなんだはあ、神さまさ命令するようなんだはあ。んだから、はいつ恐れて神さまが食うな、食うなて言ってるんだ」

ていうわけで、その男衆は絶対神さまの言うこと信じておつたが、女衆は食つてみたればうまい。ほれ、うまくてなんねえ。何だか知恵の泉湧いてきたようだから、お前も食え、われだも食えていうわけで、みんなさ食せだ。ところが次の日から、いろいろな実なつていて、口さえ開いていっど、満腹になる。だが実ていうの、限られた木にしか実んねぐなつた。ほんで何とも仕様なくて、畑に芋、

米、麦、そういうもの作って、額に汗して稼がねげば何ともはあ、暮さんねぐなつた。ほんで神さまの言うことは本当だったというわけで、正月だけは団子の木さ、実いっぱい食^くつつけて、神さまさ、まよった（返済した）。その行事が正月十五日だった。

そういう風にして、殊勝なことでもよって呉^けだもんだから、神さまも、

「そういう風にして団子さして、おら方さ返して呉^けつこんだらば、おら方ではそのの代償として、ミズキとして水不足だけはさせねえから」

こういうこと、神さま約束したていうんだな。どんぴんからりん、すっからりん。

273

語りが上手すぎて飽きてしまった時の「相槌」

昔話聞くな嫌んだくなった時にあ、

「いやいや、ほだな話、見たことも聞いたこともない。ほだな話、見たことも聞いたこともない。ほだな話……」

て、みんなして、何回も言われっど、語る方でも語らんねぐなったもんだど。

274

八 十 尋

むがしむがし、じんつあとばんちや、子どもいねくて、神さまさお詣りした。子どもが 出来たげんど、男だか女だかわかんね。

「はあ、こいつあ、こいつあ、お願いしかた一つ足りなかった」
て言うわけで、

「男の子どもにして呉らっしゃい」

というわけで、お願いした。で、いろいろ、じんつあとばんちやの経験から、男のチョンチョコが四寸ぐらいでは短かいから、八寸ぐらい、倍ぐらいにお願いすつかていうわけをお願いしたところが、ばんちや、「八寸、八寸……」て何回も言うたし、じんつあも「八寸、八寸……」て何回も言うたの、はいつ皆聞き届けて呉^けで、八十尋ばりになってしまったど。

そうすつど、ほれ、息子もだんだえ大きくなつて、一丁前なつて、ほこら用達したり、何かえするようになったりして、ほこら歩くには舐俵さ入つて背負つて歩つたど。

ところがある日、春の、春風抬頭としたこのうらかな日、ずうつと町さ用達しさ行く途中、大きい椎の木があつて、その椎の木の下で、あんまりええ日なもんだから、一服つけて、こくりこくり眠むかけしてしまつたつて。気分ええもんだから、そのチョンチョコ殿あ、スルスル、スルスル伸びて行つて、ずつと木の上まで伸びて行つた。

ところが、春なもんだから、天狗もこつくり、こつくり眠ぶかけしてだ。ちよつと天狗、氣ついて見たら、鼻先き自分の鼻と似たような品物、ひょいっと出てきて、ぶつ魂消て、ほの天狗が持ってた鳥の羽根のウチワ落した。そして下さ、ヒラリと落つて、そこで息子が目覺まして、

「ありや、なんだべ。こだい、まずはあ、伸びて行つてしまった」

て、ほの天狗のウチワであおいでみたれば、だんだえ縮まって、ほして丁度ええどこで、はいつ止めて、ほして用達し行つたな、靱俵ぶち投げて喜んで家さ帰つて来たど。どんびんからりん、すつからりん。

275 弘法大師と人身御供

むがしあつたけど。

ずうつと行つたれば、みすばらしい庵寺が一軒あつたけど。ほしてほこさ行つ

て見たれば、みすぼらしい和尚さん出はつてきて、一夜の宿請うたれば、

「いや、とてもお泊め申さんね」

「なんだどこでもええから、夜露さえしのがれつどええから、何とか一つお願いしたい」

というたげんども、

「この先に小さい村だげんど、村あつから、そこへ行つてお泊りなさい」

というて、ほこで泊めねがつたど。ほして仕方ないから、夕暮れになつたげんど、その村さ急いで行つた。ほしたればそこにも村あつけど。小さい村あつて、そこさ行つたら、みんな泣いっだけで。

「なして、ほだえ泣くんだ」

「なして、ほだえ泣くんだ」

て言うたら、

「今夜、人身御供だ。十八歳になる娘上げんなねんだ」

「その代り、わたしば上げて呉ろ」

ていうたら、

「いや、ほだごどすつど田畑荒さつて、何も穫んねぐなつて、みんな飢え死さんなねがら、何とか邪魔しねで呉^けろ」

ほして、こういうわけで、十八歳になる娘ば人身御供に上げることになつたつて語んのだど。

「んならば、そこさ行つて、念力で、おれは数珠で悪い者ば引つ叩^ばだいで呉れんなね」

ていうわけで、弘法大師さま、そこさ追つかけて行つたんだそうだ。ところが紫雲が空からたれで、何だか得体の知れない化物きたから、念力でその数珠のし上げつど思つたげんど、体がしびつで、何とも仕様なかつた。ほして見てる前で、ほの化物が十八歳になる娘ば、バリバリ食つてしまつて、大きい骨残したばりで骨がらみ、みな食つてしまつたど。

「はあ、不思議なことあるもんだ」

と思つて、ハツと吾に返つてみれば、何にもないがつたて。ほして調べて見

たれば、何年か前に、ほこの部落の人が餓死に会って、死に絶えだったて。んだから、はいつの思いが残っていったか、はいつ見せらったんだって。んだらばて、元の庵寺に来てみだれば、庵寺もなければ、何もない。やつぱり骨二・三本残っていだって。和尚さまも同じて逝くなつていだんだって。はいつばねんごろに葬って、ほれから高野山さ登って行つたんだど。どんぴんからりん、すっからりん。

276

ねずみと蛇

冬、穴ごもりしたねずみが、白いもの^め見けで齧^めってみれば、お刺身と同じだったど。うまくて、だんだえ齧^めって行つたりして、こんど一人ばり齧^めっても多い^{うか}もんだから、みんなして齧^めって、ねずみの村では、はいつ一冬齧^めって、ずうつと齧^めって行つたれば、そいつあ蛇の頭だったど。

ほうしたら、はいつ聞いた蛇村では、ごしやえで、

「んだら、ねずみの野郎べら、みな呑んでしまえ」

というわけで、片っ端から、こんどねずみが蛇の仇討ちにあつたんだど。

で、ねずみだ相談したど。

「ほんじゃ、ねずみども絶えてしまう。なぜか、うまい方法ないか」

て言うたれば、蛇は蛇行するわけだ。右さ行つたときには左さ、左さ行つたときには右さ飛ぶ方法がええがんべていう相談になつたんだど。ほしたれば一匹も蛇に食^かんねぐなつたんだど。飛び方によつて横つとびすつと蛇に食んねがつたど。ほんで大成功した。

ところがまだ困つたこと一つあつたど。蛇に食んねげんど、猫にやらつて何とも仕様ない。

「これ、何かええ方法ないか」

て、話になつたつて。いろいろ相談したげんどええ話出なくて、一匹のねずみが、

「ええことある。猫の首さ鈴つけっどええんだ」

「はいっあ、ええ」

て、みな賛成したんだど。

「んでは、その猫の首さ鈴つけ、誰が行く」

ていうたんだそうだ。して何とも、

「ほんでは、わかんねなあ」

て言うて、鈴結^ゆつけ行くねずみいねがら、今も、猫にねずみはやらっでいんなだど。どんぴんからりん、すっからりん。

277 大阪の蛙と京都の蛙

むかし、井の中の蛙、大海を知らずとか何とかて言うげんども、蛙^{びつ}ざあ、あんまり行動範囲があんまり広くなくて、ここにいた蛙はここにしかいないもんだか

ら、ほだえしているうちに、大阪の蛙は、

「京都はええどこだ」

ということ聞いた。また京都の蛙は、

「大阪ざあ、すばらしいどこなもんだ」

て聞いた。

「一生に一度、んだら大阪見てみんなね」

片方では、

「京都見てみんなね」

というわけで、ピョンピョンと跳ねで、ある山さ登った。京都の蛙もほこさ登った。ほこで蛙と蛙が行き合った。

「お前、どっちさだ」

「おれは京都だげんども、大阪ざあ、ええどこだて聞いてきたから、大阪さ行つて、大阪の街見物してみんなべと思つてきた」

「はあ、おれはまた大阪から来て、京都見物すんべと思つてここまで来た。京都

「ざあ、なんとだこだ、まだ」

いろいろ話になった。ほして一番高いどこさ、二匹の蛙は行って、お互いに京都、大阪眺めた。ところが、

「なんだ、京都なて、大阪とさっぱり変んねどれ」

京都の蛙は、

「はあ、やっぱり大阪なて、京都とさっぱり変らね」
て、二匹は、

「やっぱり、自分の生まっだどこ一番ええ」

なて、別つできたけど。どんびんからりん、すっからりん。

干柿売りと南蛮粉売り

むかしむかし、関根から置賜の方さ干柿売りに行った人いだつたど。

ところが赤湯から南蛮粉、最上の方さ売りに来たど。ちようど冬分、川口と中山の間の掛入石んどこで会つた。いろいろ、最上の話、置賜の話出て、結果は、

「南蛮粉、おれは売りに行くんだ」

「おれは、干柿売りに行くんだ」

ほこで、南蛮粉屋と干柿屋、半分半分ずつ取換えだんだど。ほして、

「んだら、南蛮粉なの、ほだえ重たくないから、まず半分南蛮粉、お前な買つて行くべ」

「ほだら、お前の柿半分買つて行くべ」

ていうわけで、二人あ、交換して行つた。ほしてほん時は猛烈な吹雪で、普通の人はみな行き倒れになった。

ところが、取換えた二人は南蛮粉は温まり、柿は冷えて、ほいづを互いに食つ

たれば、冷えと温まりとええ塩梅で、二人とも吹きどりに会わねがったって。ほんで、ほこで交換したおかげで、二人とも命拾いしたった。というわけで他の人みな行き倒れになったど。どんぴんからりん、すっからりん。

279 栗の実と西瓜

ある人が畠さ行ってみたれば、ほだえ大きくない木さ、西瓜だの南瓜だのて、すばらしいものになっていだって。

「はあ、こだな木さ、こだな大きなものなるのだ。山の栗なの、あだい大きい木で、なしてあだな小^ちつちやな実しか実^なんねべ。いまつうと（もう少し）大きい実なつて呉だらええがんべ」

て思ったったって。ほうしたれば、鼻っ端さ、栗パーンと落つて、涙出るほど痛がったって。ほんでやつと悟ったていうんだな。

「はあ、あだい大きい西瓜、南瓜みたいな、上から落ちで来たんだら、人間死ななねんだ。やっぱり神さま、ええあんばい拵えて呉^けだんだな」
て、はじめで悟ったつて。どんぴんからりん、すっからりん。

280 星のはなし — 北海道空知郡の人から聞いた話 —

むかしむかし、お星さまがお空にいた時、お星さまでも地上でも同じこと、お父さん星、お母さん星、子ども星て、いろいろあったんだと。

ところが、一人のきかん坊の子どものお星さまが居て、それはそれはきかね。事欠いたイタズラばりした。星自ら通る道がみな決っていたのに、そのきかん坊は自分が通つどこでなく、人の通つどこふさいでみたり、あるいははなはだしくなつと、自分より小っちゃい星さぶつつかつて、そいつば流れ星にして、地上さ落したりする。そういうお星さまだったと。そのきかん坊ぶりが目にあまるも

のがあったので、お父さん星とお母さん星が相談して、「旅させろ」。そういうわけで、地球上さでも落してやったら、つうと（少し）は考え変わるんでないかというわけで、地球さ、ある晩旅立たせただ。そして、きかね子どもの星がお父さん星、お母さん星から落とされるわけだ。すうつと落ちてきて、北海道のある川のほとりさ落つた。して、北海道の子どもが、

「いやあ、お星さま落つてきた、お星さま落つてきた。すばらしい大きいお星さまだ。見たればきれいだ。火事になんねえか」

て、みな騒いだ。

「いや、火事になんねげんど、すばらしいきれいなお星さまだ」

ほして次の日になつど、お父さん星とお母さん星が可哀そうになつて、

「どうだ、変りないか」

て、お空から言うど、こつちからも暗くなつど、お父さん星とお母さん星に、
光って、

「今日は変りなかった。おつつあん、おかちゃん、悪がった。地球さ落とさつて、

はじめてわかった」

て。ほして、

「どうか、こんどあんなことしないから、お空に帰りたい」

て、子ども星が言うたんだど。ところが、お父さん星、お母さん星が、

「もう少しの辛抱だ」

というわけで、

「お前さえええこと教える。お前落ちてった川の周囲のアイヌの村さ、隣の村から強いアイヌが攻めて来る段取りしつた。んだからそいつ、すぐ村のアイヌさ教えて、それを防ぎなさい」

て、こう言うた。ほうすつど村人が、

「きれいなお星さま落つてきた。みんな行つて拝^{おが}申すべ、拝^{おが}申すべ」
て行つてみた。ほしたら、

「お前の隣村から、お前だよりまだまだ強いアイヌの酋長がお前の部落に攻めて来る。早く準備なさい」

て教えてくれた。それ！というわけで、部落のアイヌたちはみんな弓矢よ、刀よと準備して、隣のアイヌが準備ととのわないうちに、こっちから打って出た。向うでは不意打くらって、ほうほうの態で退散してしまった。んで、

「あのお星さま、われわれの守り神だ。神さまだ」

て、あがめらった。ほしてお空から、お父さん星、お母さん星がつよい光出してよこした。げんどもその息子星はだんだえ冷えて行つて光らんねぐなつたどはあ、

「おーい、今日はどうだった」

て、上から言うても、かすかな声で、

「何だか光る力がなくなりましたはあ」

て。んでも、

「お空さ帰んなくとも、地元の人の尊敬うけて、ここで暮すから、ただの石になるから」

て、「さいなら、さいなら」て言うたつて。んだから今でも、星のある川へリコッ

プ、オマナイ〜というのだど。そしてアイヌの村が栄えているんだど。どんぴんからりん、すっからりん。

281 高砂族の娘 ― 九州で聞いた話 ―

あるすばらしい富豪に、女の双子が生まれた時、はいっぱ舟さのせて流してよこしたわけだ。そうすっど九州の鹿児島県の南端さ辿りついたそうさ。して、そこさ付人と共に流つて来て暮していた。

姉の方がとても妹思いで、妹と会いたいと、何とか国さ連れて行きたいと言うて、伴ぞろいして姉が旅立ったど。舟でな。

そしてようやく探して鹿児島県のある島さ着いた。ところが妹が言うた。

「おれが行けば姉ちゃんさ迷惑かっから、行くなんてさんね。あなたとおればりええったって分かんね。世間というものがあるんだから」

「いや、お前帰って呉ろ。おれ、ここさ残っから」

「いや、ほだな姉ちゃんば置いてなの、帰らんね」

そういう風なヤリトリが続いているうちに、二人がほこで疫病の神に侵されるわけだ。ほしてとうとう二人が逝くなつてしまつて、右の方が、姉が島。左の方が妹が島になつたど。

282 木のはなし

炭焼きがその木を伐つてカマさ入^いつた。石ガマというものは、真赤に焼けたうち、消さないで外にひっぱり出して、それから石灰^{いしばい}という灰かけて消すわけだ。その石灰かけて消してみたら、そっきりの木の俣^{また}だった。

んで、またカマさ入れた。七へん入れでも炭にならなかった。んだからカマドさ七回入れたからへナナカマド^ドて言うんだど。一般にはナナカマドと言つていっ

けんども、〈サイカイ〉というんだな。木で再会したという意味で、炭にならないで、〈サイカイ〉したというんだど。

「ナナカマド」の同種で、炭にしたとき非常に固いというんで、木の名も〈カタスミ〉というてるものがあつて、これはバラ科である。〈ミネバリ〉という学名だそうだけれども、非常に固い木で、この辺では〈オノレ〉と言うてる。オノレとは、「斧折れ」の意味だ。この〈オノレ〉とほとんど見分けのつかないのが〈梓〉だ。「梓の白にオノレの杵」なんていうたもんだ。

杉の木は〈スグ木〉ということで、真直の木というんだな。ヒノキは「火を起こす木」。それに準じたものは〈ヒノキ〉になんねくて、ヒノキないときに代用に使ったのが〈アスナロ〉なんだな。「明日ヒノキになろう」ということなんだど。〈ヒバ〉は「火場に欲しい木」ということなんだど。

木と柴の分け目は、木は十八年経ったのはそれで、それより若いものは柴だという。十八年で「公」^{きみ}のためになるのは〈松〉だ。杉は四十八年というて、十八

年さ三十年足さんなねそうだ。四十八年で役に立つようになるんだど。

銀杏の木は「ギンナン」と言うた。ところがたまたま実を食ってみたところが、非常に腹の具合わるい人が胃腸が治ってしまったというので「イチヨー」というようになったんだど。

「槐（えんじゅ）」というのは、支那に鬼門という、東の方の「ドサクサン」という山があつて、その山の桃の木の下さ鬼が住んでいて、山の東北に鬼が出入りする門があつた。それで東北に当る方角は忌みきらつて、ほこき門や玄関、井戸、便所なのきらうのだど。んで結局、江戸城の鬼門には上野寛永寺があり、京都御所の東北には比叡山延暦寺があるというように、鬼門は防いだんだど。その鬼は防ぐ木だということで東北に植えたのが「槐」だそうで、どこの家でも魔除けとして植えている。

ところが、その木の木理が非常にきれいで、いろいろ売りものになる。あるいは倉普請とか座敷普請に使うときは非常にきれいで、魔除けになる。よく、「トコブチオトシガキ。槐の床椽、マツコウのオトシガキ」といっている。ところがた

またま木ヘンに鬼と書いたら、なかなか「エンジュ」だと言うても売れなかった。ある人が一策を案じて、「延寿」という字に直したら、売れ行きが抜群だったので、今では銘木業者は「延寿」という名を使っている。

283 米 千 里

「米千里、粟九里、麦八里、稗が七里に、粟六里、にどいもが五里、南瓜が四里で、大根三里」というのは、そのものを食えばそれだけ旅が続けられる。

クリよりうまいという南瓜は十三里とよく言うたが、それからだったそうな。

ここのら箆かつぎは早箆といえ一里一杯の御飯をやわく炊いて食って走ったそうだ。あんまり余計でも走らんねと言ったもんだ。またあんまり腹減っても走らんねもんだそうだ。一里走つど一杯食つて、また一里走つど一杯の御飯を食ったそうだ。

高だまの庄右衛門

高だまの庄右衛門があれだけの産をなさね内、ある朝げ、旦那が起きてみた。そしたら、嫁さんが御飯炊きしたつけ。ほして何となくこう脇見たれば、嫁さんが股間の繁み出していだって言うんだな。ほうすつど旦那が、

「ほれ、出して、めんくさいぞ」

なんても言っておれない。ほん時、丁度元日だったて言うんだな。そして一句詠んだんだど。

〈元旦や さても美しい玉手箱〉
て詠んだんだど。

したれば、嫁さま、下の句つけて、
〈よろずの宝 これに入るなり〉

て詠んだ。そしたればたちまちのうち、やることなすこと、みな順調に行つてもうかった話で、家内中夜明かすほどもうかつたて。はいつ、あたりほとりさ

みな聞えて、ある家では嫁さ、びりびり、

「お前出してみろ、おれ一句詠むから」

て、ほして、ある人が真似して、

〈元旦や さても…〉

て言うげんども、眺めてみれば何だかうす気味わるいもんだから、

〈…さてもおそろし大蛇かな〉

て、やらかしてしまつたど。ほしたれば嫁さま、

〈よろずの宝 これに入るなり〉

て教えらつだんだけでも、「大蛇」など出たもんだから、

〈よろずの宝 みな吞むなり〉

て詠んだつて。ほしたれば吞みぬけ息子出て、身成しんしよみな吞まつでしまつたつて。

どんぴんからりん、すつからりん。

285 拭いて帰した

となりの嬢あ、お前の親父盗ったて聞いた奥さん、頭さ来て、

「おえねえ女だ」

ていうわけで、隣の家さ暴つて行つたれば、となりの嬢あ、平気なもんだ。

「失礼なこと言うな、他人の親父なの盗んね。ちよつと借りただけだ。ちゃんと拭いで返した」。

286 三 味 線

男の子、一丁前ていうには、三味線ちゃんとかするぐらいでないど駄目だ。はえづは今すこしていうとき、あのどこの中さ指一本ちよこつと入れる。ほうすつど邪魔になつから手取つて、手取つて、だんだん鼻声になって、テトテン、テト

テン、テンツルシャン。

287 熊 追 払 い

ある時、一人の女が山で大熊と出くわした。いきなりなもんで、なんとも仕様ない。素早く尻腰解いで、尻ふたぐったんだど。したれば、熊、ぶっ魂消た。

今まで、こつちが頭だと思つてだれば、うしろにも頭がある。して、口もある。

大抵の口は横割れだげんど、ほの口は縦割れだ。ヒゲは大抵口の上にあっけんど、口の下の方にもある。

「こだなと喧嘩すつど、何故されつかわかんない」

というわけで、大熊、大いそぎで逃げて行つたど。

女郎の半分買い

村の若衆だ、女郎コ買い行ぐだいげんど、なかなか高くて大変だった。ところで一人のトンチのええ人が、一策を案じた。

「半分でいって、全部買えばええわけだ」

ほうして、みんなさ相談して、一人の人が廓さ行ってその主人さ交渉したんだ。したれば、おら家では商売だから、半分でも三分の一でも、なんぼでも売つから、買つてばり呉^けらっしゃいて言うんだ。

若衆だ喜んで、みんな買いに行つて、半金支払つて上がった。いよいよ本番となったれば、最初遠慮していただげんど、だんだん気合いがかかってきて、これで六分、これで八分、これで全部といわれて、全部取らっただけ。中には半分しか入れね約束だったげんど、最初から全部入れた若衆もいだけ。

畳が敷いてあつた

少々のろまな若衆いだけど。働くばりで可哀そうだからていうて、友だちだ、女郎コ買いに連^せて行つたんだど。

ほして、帰つて来てから、

「あんにや、あんにや、どうだった」

て聞いてみだれば、女郎コざあ、ええもんだて感心したけど。「なして」て聞いて見だれば、

「あそごさ、畳敷がつてだけ」

て言うたど。「なして……」てきいだれば、「先のところさ、畳の跡ついただけ」て言うた。女郎コだ、あんまり小馬鹿くさい奴なもんで、蒲団から外して畳さはじがせだなだけど。

290 風呂屋の娘

あるところで、風呂屋の娘が良縁あつて、むがさつて行つたけど。ところが間もなく戻つてきた。

「なして、お前、こたえ早く戻つてきた」

「おかちゃん、おかちゃん、たまげだ。うちの人、片輪かたわでなかんべが」
「なして」

「みんな下向きだげんど、うちの人んな、登り向きだけ」

あまた男、湯に入るとき、番台から見つた娘が、下り向きを見で、初夜の契りの時さわつて見ろ、さわつて見ろと言うがら、さわつてみだれば上向きで、しかも固かつたということだつた。

291 的 ぼ ぼ

昔の人はテレビ、ラジオなてないもんだから、つい楽しみていうど、あの方さばり走るわけだど。

女のそれを開いておいて、こっちがら走って行って、巾とびみだい踏み切ってすっぽと入る、これを的ぼぼて言うなだけど。これが大變はやった。

なんだか、お前のかか、隣の親父ど稽古しただけで教えだんだど。したればほの親父、炭焼き行かねで、屋根裏さ隠れで見つだんだど。したれば、隣の親父きて、練習始めだんだど。

一回、二回失敗したげんど、三回目、すぽと入ったんだど。したれば屋根裏から、親父、
「うまいっ」。

むかし、ある村に後家親父と若夫婦といだけど。ほこの親父は本好きで、どんな本もすらすら読む。まるで学者みだえだけど。

んだげんど、絶対に書くことはさんねけど。ほして、また息子さ、

「野郎、にき、決まったら嫁コ、こっちやよこせ」
なていうて、嫁ともできていたなだけど。

人詠んで

○○吉や 書か（嬢）なくとも

読め（嫁）さえすりや 学者なりけり

293 鶯の谷渡り

むかし、大金を持った旦那衆だ、一年一度はかならず谷渡りを楽しんだものだ。
ど。

谷渡りていうのは、いちどきに女十人ぐらい、一度に裸にして野原さ並べて、ひとわたりして、一番よいところではじぐのだど。ほうすっど、後の九人が一せいに「ホーホケキョ」て鳴くなだど。谷から谷さ渡って歩くので、そういうただ。

294 老人の接吻

ある老人の言うことには、口つけていうことは、
「お互いに齒のあるうちは、本当の味しね」

齒が一本もなくなつてから、舌が自由に、ほつちや行^へつたり、こつちや来たり、するようではなくては駄目だ。

295 入齒をのんだ

あるとき、ばんちや、齒医者さ来て、

「先生、入齒のんだ」

て、あわてて来た。医者、

「ばんちや、齒あつど、ほれ」

「いや、じんつあの奴呑んでしまった」

296

なんがい なんがい

どのぐらいあつかというど、「ふたつかみ、三本ハサメで、チョンツカミ」。奥さん、大へんだ、何^なんた喧嘩^{けん}してもええが、セツパ取るぞて言われつど、「はえづだけ取んねで呉^けろ、なんでも聞くがら…」

297

珠玉の隠し場所

芝居^{しば}見^やに行つて、

「一場面、乳の下かき切つて、ぬすみし珠玉をかくしにけり」
という場面を見た一人の女^{おな}、

「なあにも、脇の下なの切んねたて、隠すところあんのに」

298 屁で返事

ある時、旦那さま、町さ行つてマンジュウ買つてきて、嫁さんさ、
「食^けえ、食^けえ」て言うたれば、

「スー、スー」て、屁たつだんだど。

「すえねえがら食え、食え」

あんまりうるさいがら、「ボーン」て、たつだんだど。したら、

「盆まで置かんねがら、おら食うべはあ」て言うたけど。

299 くさい くさい

あるところに、とてもトンチのええ人いだけど。

ある時、町の飲み屋さ行つたれば、少し足^たんないような姉コいだっけど。した

ればほの姉コさ、

「あねちゃん、あねちゃん、十円呉^けっから、おれさ見せて呉^けろ」

なて言うたんだど。したれば姉コ、「やんだ」なて言うたげんど、外の女子だに、

「お前、させでも一円、見せたばりで十円だら、ほだいええごどないべちゃ」

なて言わっただけあ、コロツと横になつてしまったんだけど。したれば、はいつ腰巻あげて見だけあ、

「いやあ、くさい、くさい」

て言うたきり、一文も出さねけど。見せだな十円よこせなて言わんねくて泣寝入りだけど。

300 初産のスウ

あるところの嫁さん、初めてお産する時、思ったよりひどがつたんだと。

「こだえひどいごんだら、今度から赤子^{んぼこ}拵えなの、決してスー」「今度から決してスー」て、頑張つてやつと産した^なんだと。旦那さま心配して、後で聞いて見だれば、「スー、スー」て言うたげんど、「…ネ」と言わねていうたけど。

301 栗拾い

あるとき、仲のええ二人が場所打合せて、栗拾い行く約束した男の方が先に行つて待つていだんだと。したれば彼女は旦那に追つかげらつて、二人できて目的果さんねけど。そこで一策を案じて一番高い木の天辺まで登つて、怒鳴つたんだと。

「おーい、なんだ、人前もあるつた、二人重なつて、どこなえべな」

て言うたんだど。二人は上方見ながら、

「重なつてなのいねえぜ」

て言うたんだど。

「いやいや、上の方がから見つずど、重なつていっど、ほら」

「木の上さ登つて見ろ」

ていうて、旦那は栗の木さ登せだんだど。

「十尺ぐらい登つて見たげんど、重なつてなの見えねえなあ」

て言つたんだど。

「いやいや、下の方だからだ、一番上の方まで登つど、重なつて見えるなだ」

五分もかがつてやつと天辺まで登つたど。ほんどき、いきなり重なつて呉だれば

上から見つた旦那、

「ここまで登つたれば、やつぱり重なつて見える」

むかし、ある村の若衆が道端で、下刈りしたんだ。したれば下の方が男の座頭を女の座頭が、何やらヒソヒソ話しながら来たんだけど。

「ここら辺まで来たら、人なの誰もいねべあ」

「どれ、きいてみつか」

なて、

「山寺方面どっちだべっす」

なて聞いだんだ。みんな口さ指あでで、「シート」て黙っていただれば、

「ああ、だれも居ねようだ」

なていだけあ、いきなりおっ始めだんだ。若衆だ面白半分で萱の棒で女の方の尻つついだんだ。したれば、

「ほっと、アブがきた」

今度、男の方はつついだれば、

「こんだ、こっちや来た」

なて、ゆうゆうとやっているんだと。若衆、面白ぐなて、「アハハー」て笑ったれば、抜くが早いか、杖棒つれんぼおつぶるます（廻す）のが早いがわかんないがったど。

303 大きい者同士

ある村に、男根があまり大きすぎて悩んで人いだけど。

ある日、村の宿尻まで行つたれば、一人の女がふらふらやってきたので、もしやと思つて尋ねて見んだと。したればやっぱり股間のしげみがあり大きすぎで困つたていうわけで、すぐ意気投合して、道路から少し入った草むらに隠れておつ始めだんだと。したれば、あんまり大きいもんだから、にありにありて音したんだと。ところがそこさ馬車ひき通りかかつて、「荷有り、荷有り」というもんで、

「荷物こっちだ」

て、ほごき小走りして行つて見たれば、人の気配を感じた。二人、いきなり脱いだれば、「セトン」で音出したんだ。馬車ひきあ、「セトン」ていうもんだから、

「ああ、瀬戸もの、ぼつこれやすくて駄目だあ」
て、戻ったけど。

304 なんとった

ある飯場で、土方だ飯炊き姉ちゃんさいたずらして、そおつと行つて、長茄子を突込んだり、大根を入れたり、ねぎば入れたりして、次の日になつて、

「姉ちゃん、姉ちゃん、昨夜、何も変つたことなえがったが」
て聞いたれば、

「今朝のおつけ（お汁）の味、何^{なん}たった」

305

多^ういところ^かはええべな

「やっぱり、こだごだごど思った。なんだ隣の親父どするなて、もつての外だ」
て言うたれば、かか、平気な顔して、

「なに言う。親父、お前さふだふださせだ外余った。多^ういところ親父ささせて何
わるい。御用ていえば、今でもさせっから」

「こいつ！」

て言^やつで、親父、何も言^やんにやいがつたど。

むかし、ある人あ、山さ行つて棒占いをした。一番早くとび出した奴は、トンボの背中さのつて飛んで行つた。

「あーあ、あの野郎はヒコキのり」

二番目の奴は、木の枝さからまって、くるくる廻つた。

「あーあ、あの野郎は体操の選手」

三番目は地べたさ、ぼたぼたて落ちた。

「あーあ、あの野郎は百姓だ」

て言うたけど。

307 ここは便所か

夜中に親父がむっくり起きた。かが、

「親父、どき行く」

て聞いたれば、

「便所さ」

て言うたずまあ。あんまり戻つて来ねがら、かか行つて見だれば、何と女中さんだったど。ほうすつど、かかあ、

「ここは便所か」

て言うけあ、尻けつふたぐて、小便じゆうじゆうと、たつただけど。

大人語りの「天人女房」

天人が羽衣盗らったから、漁師の家さ追っかけて来るわけよ。そして漁師の源五郎は、うしろも見ねえでどんどん来たど。そうすど源五郎は家さ入った。

その天人も仕方なくて、うしろ追っかけて来て、家さ入ったど。ほして源五郎は若衆なもんだから、天女の体見て、欲情にからったど。ほつつ見っだ天女が聞いた。

「それは何ですか」

「いや、これは……」て、困って、

「こいつは掃除棒というもんだ」

「掃除棒ちゅうのは、どうするんだ。どこ掃除するんだ」

て聞いた。天女は下賤の、そういうものは見たことなかったからな。

「体のまんなから、いろいろ不浄なもの、たれ流していっど、バイ菌が入って体がくさってくる。そこを掃除する棒だ」

「そんな、わらわのも、くさってるか」

聞いてみたらやっぱりそうだった。月のものがあつたど。それで、

「んだらば、おれが掃除してくれる」

というわけで、人作りが始まったど。ほしてだんだんに筋が通るようになって大変ええ掃除棒だつていうことになって、ほだえしているうち、子どもが出て夫婦になつて暮すようになったど。

309 由緒ばなし

○ 皇族を「竹の園生」と申し上げるわけ

昔々、支那（前漢）の孝文帝の子供孝王という人が、お庭に竹を植えて修竹苑と名付けられた故事から出た事の葉である。

○ 鬼 門

昔々、支那の東方に慶朔山という山があつて、大きな桃の木の下に、鬼が住んでおつて、山の東北に鬼が出入りする門があつたということから、東北に当る処を忌み、その方角に門や玄関や井戸や便所のあることを嫌います。江戸城の鬼門には上野寛永寺、京都御所の鬼門には比叡山延暦寺があるように、この方位には神仏を祈つて鬼門除けとした。

○ 藪医者ということ

昔、丹波に藪というえらいお医者さんが居つた。その門人どもが、自分は上手でもないのに、師匠の藪の名を持ち出したので、かえつて下手な医者 of 代名になつたと申します。また藪は風位でもざわざわと騒ぐからだとも言ひ、一説には、薬種を買い集められないため、藪からいろいろの草根木皮をとつて調製するからだ

とも申します。

また、ヤブはやボに通じ、藪にもなれない者を筭、または土手医者など…。

○ 出雲の神は縁結びの神

出雲大社には大国主命を主神とし、タカミムスビの神、カンミムスビの神の二柱の神を客座に合せ祀っておりますので、その中の二柱の神にある「むすびのみ」という御名に縁結び給うということ…。

○ 新年に屠蘇を祝う

昔、支那に屠蘇庵という僧坊の主が、毎年大晦日に一種の薬を一袋ずつ家々に配った。そのことから新年に「とそ散」を服用するということが広まったのこ
とです。

とそ散は白求桔梗椒桂心大黃など、種々の薬味を調合、之を服用すれば老人は若返り、病ある者は健やかになり、一人が服すれば一家全体が無病になり、一家が服すれば一村全体が恙ないとか唱えられ、日本では嵯峨天皇の頃から新年の儀式の中に入れられ、大晦日に、とそ散の袋を井戸に吊し、水に浸しておき、元旦の朝これを引上げて、温かい酒を注いで飲んだもの。それが後に味醂の中や白酒の中に入れるようになった。

○ 相撲の四十八手

昔、徳川の末期に反り十二手、捻り十二手、投げ十二手、掛け十二手を配して四十八手としたが、のち裏四十八手とか、手捌手碎などを合せて、今日では百四十二手となっている。

○ 下馬評について

門外漢の当て推量という意味で、「下馬先の評定」をつめていった言葉で、下馬先とはお城の大手（正門）、裏門は搦手といい、前の諸人が下馬下乗する場所のことで、お供の連中がそこで主人を待っている間に、城内の噂をすることを「下馬先」の評定、即ち「下馬評」という。

○ 注連縄（七五三なわ）

天照大神を手力男命が天の岩戸から出しまいらせた時、岩戸の口に尻久米縄を張って、「これより内へは再び入り給うな」といって、祝い上げ奉ったという故事によって、注連縄を神前に張る儀式が伝わり、後にはそこより不浄の者の入るを防ぐ意味となった。

○ 晦日（年越）そば・引越運そば

大晦日、年越そばを祝うのは、そばのように細く長く身上が延びる（殖える）ことをそばにあやかるといふので、また運そばとは幸運がそばにあるという意でもある。

引越そばは転宅の際、おそばに長く御交際願いますの意。

○ 上戸・下戸

昔、支那民間の婚礼式には民戸の上流の者、即ち上戸は八瓶（へい）と称して多量の酒を用いることが許されていたが、下戸にはほんの少々、ほとんど無に等しかったという。また秦の始皇帝が咸陽宮という大宮殿を築いた時、高閣の各階毎に門戸があり、冬は上になるほど寒く、門番になり手がなく、一策を案じて上の門戸になるほど酒を多く与え、寒さを凌がせた故事から、上戸・下戸ができた。

○ 小田原評定

戦国時代のこと、北条氏政父子は小田原城にいましたが、秀吉が攻め寄せると聞き、戦うべきか和睦するか群臣を集めて評定したが、和戦両説いろいろあつて容易に決せず、ぐずぐずしている間に小田原城は秀吉のために完全に包囲されてしまい、遂に城将の割腹、氏直の放逐、一門の流謫という悲惨な結果を見ましたので、以来相談ばかりして、衆議のまとまらぬことを小田原評定という。

○ 白羽の由来

スサノオ命が出雲の簸の川上で大蛇を退治されたのは、櫛名田姫が大蛇の人身御供に召されていたのを、助けられたが、それを見込まれた少女の家の軒先に、いつとはなしに白羽の矢が立っていたと言い伝えられ、大勢の中から重要な地位に起用されることを、白羽の矢が立てられたなどと言っている。

○ 御中元

昔、支那の曆で陰曆一月十五日を上元、七月十五日を中元、十月十五日を下元と唱えて、灯明を供えて「太乙星^{たいいつ}」を祭りましたところが、中元の日はちょうど仏教の方では盂蘭盆会に当たりますので、御歳暮と共に配物などをするようになった。

○ 閻魔さまと地藏さま

エンマは印度の言葉で「縛王」即ち罪人を縛る王ですから、地獄を司つて死者の裁判官の役をした。

地藏さまは動かざること大地の如くであり、且、知恵思慮の深く秘藏されているというところから地藏といわれます。釈尊滅後五十六億七千万年後に第二の釈迦として弥勒菩薩が現われるまで、一切の衆生をお救い下さる仏さまである。

○ 正月の門松

太古に神を祀るのに、二本の新しい常盤木を立てて、場所を清めるしとししていた事から、それと同じ筋合いで、松はめでたい木であるとされているので、新年を祝う意で、延久の頃から門前に一对の松を立てることが始まり、後に応永の頃になつて竹を添えることになった。

○ 絵馬のこと

昔、貴人を葬る時にはその従者や乗馬を共に葬る習わしならがあつた。神社に馬を奉るのはこれから起つたので、近世でも將軍家や大名は神社へ馬を奉納し、それを「神馬」と呼んでいたが、神馬を献じかねる人々は、それを絵に描いて奉納し、それを絵馬と称した。また奉納者の名前は書かないのが常識であつた。

○ 弥次やじの語源

おやじ馬から出た語。老馬の役に立たないのを、「やじ馬」といい、やじ馬は常に若馬の尻について歩くので、尻馬といわれ、やじるの動詞が生れた。

○ 節分の豆

第五九代宇多天皇の時、鞍馬山の鬼が都を荒すのを、毘沙門の御示現により、七人の博士が七七、四十九日の間、お祈りをして鬼の害を封じ、三石三升の炒豆で鬼の目を打ちつぶし、災厄をのがれたという故事に起因するもの。

○ 総領の甚六

総領は家を統^{すべ}おさめる意。甚六は順祿。家督を継ぐべき長男なり長女なりは、たとえ馬鹿であつても決つた順序により、家の祿を継ぐということ。世間一般に長男、長女はおおようと、時に愚なる者も多かつた。

○ 除夜の鐘の百八

仏教では人間の煩惱は百八あり、これを救うにまた仏、菩薩などの百八尊があり、百八の鐘がこれにちなんでいる。同時に次々と百八の煩惱を退散せしめ、心身共に清浄のうちに功德をたたえることによる。

○ 離縁状を三くだり半ということ

何某と何女と夫婦の契相結びおり候ところ、家風に合い難き廉有之（または病氣、あるいは不都合）、合意の上、何女を離別致候事。

むかしの去状はこんな風に書いたもの。これを三行半に書き終るというのが、離縁状「三くだり半」である。

○ 足袋の文数

昔、和銅元年に我国最初にできた一文銭（和同開珎）を七枚は七文、九枚半は九文半とした。一文の直径は曲尺八分、鯨尺六分四厘というものから来た。

○ 酉の市の熊手

毎年十一月の酉の日、おとり鷺神社の縁日であり、市日である。酉は取りに通じ、縁起よく、商人は商戦に勝つように祈願をこめて、熊手お多福面、入舟などを買って、熊手は沢山の福徳をかき集めるように。お多福面は「福が多い」ということ。入舟は宝の入舟という意味である。

○ 月下氷人

昔、支那の冷孤策という人があり、夢に氷上に立っていると、氷の下に声があったので相語ったところ、それが若い美人で、たちまち意気投合して結婚したという夢物語が起源となった。それから媒酌人のことを氷人というようになった。

○ 月下老人

また、支那に、月下老人というものがあり、深山の城に住み、月に向つて名簿のような書を閲覧しながら、結婚させたい男女を思いつくと、袋の中から赤い縄を出して通力で、その二人の足を縛りつけると、たちまち二人は運命が決して、仇家異国の人といえども必ず夫婦になるという。これを「赤縄の縁」という。

○ 左官

昔、禁中の御修理をするのに、無官の職人では出入りができないので、臨時に木工寮の佐官とする習わしであったが、その佐官を「左官」と書くようになったという。

○ 岡目八目

脇目八目ともいうが、岡は地の小高いところ。岡から低いところを見渡すと風景がよくわかるように、囲碁も脇から見ると、その推移がよくわかる。対局者より八目ぐらい強い智恵が出るという意である。

○ 韋駄天走り

八大将軍の一武装として金剛杖をもつ仏法守護の神であり、釈迦が涅槃に入られた時に、足の速い抄疾鬼という鬼がお釈迦さまの歯を一双盗んで逃げたので、韋駄天が跡を追いかけて取り戻し、唐の時代になって、南山道宣律師に授けたという足の速い鬼を追いかけて捕えたので、韋駄天はそれ以上に速いわけで、これから足の速いことを「韋駄天走り」というようになった。

○ かかしを「案山子」と書くこと

支那の禅宗の僧侶がそう呼び始めたといいます。「主山は高く、案山は低し」などという語があつて、案山は山中の低地を指すのですが、そういうところは必ず田畑として耕作された。しかも山中だけに鳥獣の害が多いので、大抵かかしが作られていた。ミノカサを着たその形が剽軽なので、俗人離れのした禅僧がそれを友だち扱いにして、「我が案山の子よ」とよんだ。

かかしの語源は獣肉を焼いて串に刺して、田畑に立て、その臭気のために悪獣が近寄らず、田畑の害をまぬがれた。臭いがかがせるという意味から、かかしと称するようになった。

○ 正月の松竹梅

松竹梅は、昔から「才寒の三友」といわれ、松は千年かわらぬ縁、竹は直にして節操の正しいもの、梅は百花に魁けて咲く、冬の寒い時節にも、この三者は負けない。百年変らぬ栄を得ようというものの。

○ 亭主の好きな赤烏帽子

一家の主人たる者が好きなものなら、人が見て笑うような赤塗の烏帽子でも、その好むままにして置けということ。

○ 引導を渡す

引導とは、人を仏道に帰依せしめることで、葬式のときの僧侶が、死者を極楽浄土に導くことは、死後の引導で初めは僧侶のみに行われたが、あとで一般に行われるようになった。単に引導といえば、死後の方を指すようになった。

○ 人の姓はどうしてできた

姓はかばねであり、氏族の長に対して、天皇より賜わった名称であり、その発生には職業に由来するもの―連・宿称―。功績によって賜わったもの―藤原雀部ささべ―。皇胤血統によるもの―源氏・平家―があり、さらに氏族の内部が増加するに従って、あるいは姓に因み―藤原から藤岡・藤村の発した類―また地名から取った―初瀬・長瀬・中村の類―、苗字を称したものもあります。今日ではすべてこれらが姓として取り扱われた。なおまた、姓は斯くの如して由緒の正しいもので、徳

川時代まで農工商のいわゆる平民階級にはなかった。それが明治に入って戸籍として登録する必要のため、明治三年に平民にも姓名を付することが許されたので、古い縁をたずねて由緒ある姓を用いたり、地名によって新しい名を工夫したり、自己の好みによって勝手につけたりして、今日にいたり、千差万別である。

○ 栄達を「登竜門」

竜門は支那の黄河の上流にある山の名ですが、そのふもとを流れる時の黄河は最も急流で、大魚迫って集まるもの数千にも及ぶ。その水流を登りかねるといふ。もし鯉がそこを登れば化して竜となると言い伝えられるほどで、それを人の栄達の門口にたとえられた。

○ 松の内

松の内とは、松飾りをしている間という意味で、一月一日から関東は七日まで、関西は十五日までである。

○ 八百長

相撲会所（今は協会）のお出入であった八百屋の長さんと称する者、相撲年寄であった先々代の伊勢の海の碁の相手をして、自分の方がずっと上手であったにもかかわらず、御機嫌とりに、わざわざ勝ちをゆずっていたことが有名となり、わざと勝ちをゆずる相撲を八百長相撲といい、いかさまのことも言うようになった。

○ 陣笠ということ

もともと陣笠は、陣中でかぶる笠のことで、特に足輕などはいわゆる雑兵にはうすい鉄で作った播鉢笠を与えていただけで、ヨロイも着ず、大将の命令のまま働くだけで、陣笠といえば、足輕、雑兵のことになる。転じて勢力のない政治家が何の役にもつせず、幹部の言うままに盲従している事を陣笠と呼んでいる。

○ 神様の前に、なぜ鳥居を立てるか

昔、天照大神が天の岩戸におかくれになった時、八百万の神々が八百万の智恵を出して、岩戸の前に丸木の柱を二本立て、その上に横木を渡して、これに常世の長鳴鶏を止まらせて、朗らかにあかつきの声をあげさせたのが、すなわち「鳥居」である。

○ 元の木阿弥

筒井順慶の父、大和郡山の城主筒井順昭の病死後、喪を秘して見参者には容貌の似た木阿弥という僧をうすぐらい病床に置いて応対させ、三年の後始めて喪を発表したため、とにかく三年間城主を装っていた木阿弥が、元の木阿弥に返った故事から、この語が起った。

○ 明神さま

「明」とは智慧がすぐれて、四方八方見通しが利くことをいい、「神」は威徳きわめて広大、神妙、不可思議の力あることを示す言葉を「明神」と呼ぶ。

○ よい役者を千両役者というのは

昔、一座の主な役者で、技芸のすぐれた者には給金を一年間に千両与えていたことから起った言葉で、今でも人気俳優のことを千両役者という。

○ 福助とおかめ

今から二百年前、八代將軍吉宗の頃に、摂津国西成郡阿部の里に、佐太郎という大頭で背低の不具者がおって、香具師に買われ江戸に出て見せ物となり、名を「不具助」をもじって「福助」と名のつたという。それが大受けだったので、自分の姿をやキモノに拵えて売り出したところ、それも大当り、さらに某旗本の家に雇われると、その家がまたまた福運つづきというありさま、いつのまにか「福の神」と崇められるようになった。

おかめは福助よりさらに百年ぐらい前に、足利時代の末、畿内のある神社の巫

女に下ぶくれの愛嬌あるお亀というのがおつて、よく繁昌したので、諸人に愛されたという。

○ 七福神

慈眼大師の七福説によりますと、七福神はそれぞれ左の如き徳をあらわしているのだそうです。即ち大黒天は裕福、恵比須は清廉、寿老人は長寿、福祿寿は人望、布袋は大量、毘沙門は威光、弁財天は愛敬を現わすもの。

○ 武芸十八般

一、弓。二、劍。三、騎馬。四、薙刀。五、槍。六、水練。七、忍術。八、柔。
九、鉄砲。十、墓目。十一、火矢。十二、棒。十三、鋌もしり。十四、突棒つくぼう。十五、刺
股。十六、十手。十七、烽火。以上を武芸十八般という。

なお、これに加うるに流鏑馬、笠懸、犬追物、牛追物、水馬居合、鎖鎌騎射、騎馬筒、手裏劍の以上で二十八般ともいう。

支那にても、十八種の武技あり。予（てや）、鎚、弓、弩、いしゆみ鉋、ておの鉋、鞭（しない）、筒（むち）、劍、劍鏈（けんくさり）、杵（くまで）、斧、鉞（まさかり）、戈、牌（たて）、戟（ほこ）、鎗、棒、槌（なげほこ）がある。

○ お茶の効用

昔、中国では一日にして七十毒に遇するも、茶を得てこれを消すといつて、昔から珍重されたもので、我が国に渡来してからも、初めのうちは薬用の飲料となっていたが、最近ソ連の化学研究所では日本緑茶の中にホルモン剤をはるかに凌ぐ不老若返りの成分のあることを発見し、国営の茶所を作ったとのことで、正しく解毒、興奮、食欲増進の効力があつた。

○ 金の切れ目が縁の切れ目

「貧乏が戸口から入ってくると、愛が窓からとんで行く」というヨーロッパのこ
とわざがあるが、金のなくなった時がつながりの切れ目、金がなくなるとソツポ
を向かれて、相手にされなくなるのが世の常です。

女が男と手を切ろうとするのも、金を思うようにもらえないため、嫌になるの
が主な原因です。似たようなことわざに、

「愛想づかしは金からおきる」

「金のないのは首のないのに劣る」

「夫婦ゲンカもないから起る」

○ 悪銭身につかず

不当な方法で得た金は、つまらぬ事に使って、やがては失なってしまうもの。正当な金は勤労によってのみ得られるため、一度得た金は大事にしますが、不当な方法で得た金は、大切にしないのが人情です。中国にて「何もしないで得たものは何にもならず出て行く」と言います。バクチで得た金も身につかないもので、ときには身を滅ぼすものになります。似たことわざに、

「人垢は身につかぬ」

「盗人は盗みによつては金持になれない」

「不当に得られたものは不当についやされる」

○ 金は天下のまわりもの

金は同じ所にばかり止っておらず、ぐるぐる廻っているものだから、現在は貧乏でもいつかは自分にもまわってきて、金持になることもあるはず。悲観したものでないというのが、似た言葉に、

「金は世界のまわりもの」

「宝は国の渡りもの」

反対のことわざには「金は片釣」「金と子どもは片まわり」などがある。

○ 金とチリは積もるほど汚ない

金持は財産ができるほどケチになるといいますが、これは貧乏人の立場から出たことわざ。金の外に何も持っていない人に金を惜しみなく出せというのは、言う方が無理というものです。似たことわざに「金持と灰皿はたまるほどきたない」

○ 地獄の沙汰も金次第

死んで地獄に追いやられたものは、そこで裁判を受けるが、そのとき金をつかませると、有利な判決をしてもらえるといわれます。それくらい世の中はすべて金の力で支配されています。

人間が金のために生きているものだという事は、金に関することわざが多いことでもわかるはず。

「阿弥陀の光も金次第」「現世も後世も金次第」「仏の光より金の光」「千金は死せず、百金は刑せられず」「金さえあればバカも旦那」「金さえあればとぶ鳥も落ちる」「人間万事金の世の中」

反対のことわざは、「金のうらみの世の中」「金は仇」

○
シ
シ

シシというのは、「肉」のとれる獣のことを言う。熊は「シシ」、カモシカは「アオシシ」、猪は「イヌシシ」、鹿は「シシニク」という。

佐藤家の昔話も第七集を数えることになったが、この集を編むまでにいくつかのことがあった。NHK山形放送局に、昔話の話者をおよびして、お手持ちの好きな昔話を語っていただく番組であったが、佐藤さんもその一人として語りをしていた。

今夏に是非一度お聞きに参上したいと思って連絡申し上げると、折り返し体の具合がわるく、しばらく待つてくれということだったので、単なる過労ぐらいと考えていたところ、胃がわるくて入院されたことを、後になって知ってびっくりした。退院なさったというところで、待つていたところ、病床でメモして下さったものも溜まったので、連絡があつて、入院中だが、大体体も回復なさったということで、十月十二日に山市の小林病院の病床にかけつけ、お見舞いを申し上げようとする、待ちかねたように、ノートを見せてくれ、しかもたちまち八話を語ってくれた。二七二話から二七九話までが、その時テープレコーダーにおさ

めたものである。また二八五話以下三〇八話は、いわゆる「つや話」であるが、研究資料のためにのせたものである。

「笑話」の一つでもあるが、藁仕事小屋で若衆に語られたこれらの「つや話」は必ずしもすぐれたものとは言えないにしても、おおらかな性の笑いが、閉ざされた東北の分厚い冬空の下で、小さなイロリをかこんで、若衆たちが藁仕事をやりながら求めたものが何であつたのかの片鱗をうかがうに足る材料の一つなのであろう。

今度の採訪では、一つ新しい昔話伝承の問題を提出していただいた。二七三話の「語りが上手すぎて飽きたときの〈相槌〉」の問題である。子どもの頃にあつたということ、昔話聞くな嫌んだくなつた時の相槌というものがあつたという。語り爺の前の子どもたちの飽きてしまった顔付きが浮かんできそうな「ぼだな話、見たことも聞いたこともない」という言葉のあざやかさにはびっくりした。大変貴重な話を伺つたものといえる。

三〇九話の「由緒ばなし」はずっと以前に佐藤さんがノートにしたものをお借りして筆写しておいたものである。佐藤さん自身、子どもの頃に聞いたものを、二・三の文献にも当たって確かめて文章化されたもののように思われるが、きつと「咄」の中にはこのような由緒ばなしも多かったにちがいない。樋下という佐藤さんの生まれ育った宿場町にふさわしい話題であつたろう。

なお、二八〇・二八一・二八二は前の採訪の折に聞いたもので、ガリ版にする折がなかったから、この際に収録したものである。佐藤さんは軍隊に行つておつたときに、よく隊長の部屋に招かれて昔話をするがあつたという。そんな折に語りもし、他人の話もよく聞いて記憶している。アイヌの伝説や高砂族の王女の話などはそんな折に耳に入つたもので、語りというよりは筋書きとして語つてくれたものであるが、伝承そのものが、いささか職業的な方々によつて持ち運ばれた例の一つにはなるかも知れない。

「つや話」を含めてであるが、佐藤さんの語つた昔話はすでに三百余となつた。これで山形県下では第一の語り手であることが証明されたといえる。まだ「動物

昔話」やポピュラーな絵本化した昔話などはお聞きしていない。特別な意図があったわけではないが、佐藤さんの心づもりでは、思い出しても忘れてしまいそうなのから語りたいということらしい。

表題とした「ぬるくす男」は上山の方言で、横着とかふしだらの意であるが、「三年寝太郎」のように、村人を率いて反骨ののろしを上げる者もないわけではない。完全に笑話化した「ぬるくす男」の話ではあるが、逆にこれを藁仕事の手を休めて聞いた若衆の中には、きつと笑い話でない「ぬるくす」を自覚した人々もあったのだろう。それが宿場でなくなった檜下部落を新しい農村にして来たにちがいない。

この集を編むに当たって、病床に臥されていたにもかかわらず、ノートをとり、語りを思い出して語って下さった佐藤さんに深い敬意と感謝を捧げる次第である。

武 田 正

昭和四十九年十月三十日

ぬるくす男
佐藤家の昔話(七)

昭和四十九年十月三十一日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二二三の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十二年十二月十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあつたけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)